慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後英文学と文化、社会、労働の関係の研究 : レイモンド・ウィリアムズを中心に
Sub Title	A study on Raymond Williams and the relationship between postwar British literature and culture, society, and labour
Author	近藤, 康裕(Kondo, Yasuhiro)
Publisher	
Publication year	2014
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2013.)
JaLC DOI	
Abstract	20世紀英文学と文化との関係を、文化、社会、労働といった観点から検討し、時代の変化への反応としての文学と文化の一側面を明らかにした。とくに、D・H・ロレンス、クリストファー・コードウェル、リチャード・ホガート、レイモンド・ウィリアムズといった作家、批評家の仕事に焦点をあてた。ウィリアムズの、これまでにあまり論じられることがなかった_Second Generation_や_Loyalties_といった小説を論じた。ニューレフト初期において重要な_Universities and Left Review_等の記事の分析にも取り組み、キーワードから現代社会を批評するという試みで共著の本を出版した。 I have been trying to elucidate the relationship between twentieth-century British literature and culture in terms of culture, society and labour. Culture including literature can be conceived of as the response to the change of society. Therefore, I have dealt not only with literary texts but also with history and social criticism. Especially, I focus on the works of D. H. Lawrence, Christopher Caudwell, Richard Hoggart, and Raymond Williams. I have traced the trajectory of the making of Williams's literary criticism and cultural theory by closely analyzing his novels such as _Second Generation_ and _Loyalties_, which have rarely been discussed, as well as _Culture and Society_ and _The Long Revolution_. I have also analyzed important articles in _Universities and Left Review_ and other significant magazines in the late 1950s. I published a co-authored book entitled _Keywords for Our Culture and Society_ following Raymond Williams's method of historical semantics.
Notes	研究種目 : 若手研究(B) 研究期間 : 2011 ~ 2013 課題番号 : 23720149 研究分野 : 人文学 科研費の分科・細目 : 文学・英米・英語圏文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_23720149seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０１４９

研究課題名（和文）戦後英文学と文化、社会、労働の関係の研究――レイモンド・ウィリアムズを中心に

研究課題名（英文）A Study on Raymond Williams and the Relationship between Postwar British Literature and Culture, Society, and Labour

研究代表者
近藤　康裕（KONDO, Yasuhiro）

慶應義塾大学・法学部・講師

研究者番号：２０５９５４０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円、（間接経費）　　840,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀英文学と文化との関係を、文化、社会、労働といった観点から検討し、時代の変化への反応としての文学と文化の一側面を明らかにした。とくに、D・H・ロレンス、クリストファー・コードウェル、リチャード・ホガート、レイモンド・ウィリアムズといった作家、批評家の仕事に焦点をあてた。ウィリアムズの、これまでにあまり論じられることがなかった_Second Generation_や_Loyalties_といった小説を論じた。ニューレフト初期において重要な_Universities and Left Review_等の記事の分析にも取り組み、キーワードから現代社会を批評するという試みで共著の本を出版した。

研究成果の概要（英文）：I have been trying to elucidate the relationship between twentieth-century British literature and culture in terms of culture, society and labour. Culture including literature can be conceived of as the response to the change of society. Therefore, I have dealt not only with literary texts but also with history and social criticism. Especially, I focus on the works of D. H. Lawrence, Christopher Caudwell, Richard Hoggart, and Raymond Williams. I have traced the trajectory of the making of Williams's literary criticism and cultural theory by closely analyzing his novels such as _Second Generation_ and _Loyalties_, which have rarely been discussed, as well as _Culture and Society_ and _The Long Revolution_. I have also analyzed important articles in _Universities and Left Review_ and other significant magazines in the late 1950s. I published a co-authored book entitled _Keywords for Our Culture and Society_ following Raymond Williams's method of historical semantics.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：文学　文化　社会　労働　ニューレフト

１．研究開始当初の背景

平成 21 年度に、科学研究費補助金の特別研究員奨励費により「20 世紀英文学とブリティッシュ・ニュー・レフトとの関係についての研究」の題目のもとで研究を行なった。ここでは、単年度の研究となったため、20 世紀英文学という幅広い研究対象とニューレフトという文学的・文化的・社会的な運動とを関連付ける作業はまだ限定的であった。しかし、この限定的な作業から、どのような点に着目すれば、ニューレフトが 20 世紀英文学から何を吸収し、いかなる影響を与えたのかについて有意義な研究となるかという論点が見えてきた。ニューレフトはイギリス社会の第二次世界大戦後の変容と密接に関わっているが、これには労働党政権による福祉国家の確立や労働者階級への注目の高まりが深く関係し、労働運動やマルクス主義にコミットする文学者や批評家たちが主導的役割を果たしたことから、労働や労働運動とレフトの言説に着目しつつ、それを 20 世紀イギリス文学史の流れのなかに位置づけて研究するというテーマの確立に至った。そして、平成 23 年度から「戦後英文学と文化、社会、労働の関係の研究――レイモンド・ウィリアムズを中心に」の題目のもとで、ニューレフトにおいてもっとも重要な役割を果たした小説家であり批評家であるレイモンド・ウィリアムズの仕事を主たる研究対象として、第二次世界大戦後のイギリス文学と批評における文化、社会、労働といったテーマがいかに扱われてきたのかを分析する作業に入った。

２．研究の目的

目的のひとつは、ひろく 20 世紀英文学の流れのなかでのレイモンド・ウィリアムズの仕事の位置づけを検討することである。レイモンド・ウィリアムズは 20 世紀前半の作家 D・H・ロレンスを高く評価し、またその限界をするどく指摘した。ウィリアムズの小説、批評の双方におけるロレンスの影響力は極めて大きいから、ロレンスからウィリアムズへの流れをたどることによって、20 世紀英文学のなかでもこれまでもっとも研究の蓄積が多い時代であるモダニズム期の文学から何を 20 世紀半ばの批評家が吸収し、それがいかなるかたちで文学論のみならず文化論や社会批評と結びついたのかを明らかにすることが、こうした方法の目的である。そのためには、モダニズム期の作家が直面していた時代的背景、とくに、社会の急激な変化を的確に理解することが不可欠であるし、単に文学テクストのみならず、文学を論じつつ社会全般を批評したテクストを 20 世紀前半から半ばにかけてのスパンにおいて見出していくことも重要となる。このため、ロレンスのテクストに加え、ロレンスを批評した同時代の批評家である F・R・リーヴィスやクリストファー・コードウェルのテクストを精緻に読み解いていくこともまた目的のひとつとなった。

ふたつ目の目的としては、レイモンド・ウィリアムズの仕事がいかなる時代思潮において形成され、彼の批評がそれにどう影響を及ぼしたのかを明らかにすることである。ウィリアムズが英文学を学ぶなかで所謂ケンブリッジ英文学という学派と対峙し、自分なりの文学論を確立していこうとした軌跡をたどることもそのうちのひとつである。これには、先に述べたリーヴィスの文学論や社会批評をいかにウィリアムズが批判したのかを検討する必要があった。また、ケンブリッジ英文学に代表されるような文学研究のあり方と対峙して新たな思潮を生み出そうとした流れは明確にニューレフトの生成期に見出すことができるから、ウィリアムズのみならず、作家のドリス・レッシングや批評家であり歴史家の E・P・トムスン、おなじく批評家のリチャード・ホガート、カルチュラル・スタディーズの確立と隆盛にもっとも寄与した人物の一人であるスチュワート・ホールといった論者たちの議論を把捉することがこの目的のための重要な作業となった。

三番目の目的は、ウィリアムズの仕事それ自体を 20 世紀英文学と同時代の文化的コンテクストにおいて正確に分析することである。このために、ウィリアムズのテクストを精読し、それをめぐる二次文献を収集・分析して、小説については作品論を、文化論と批評については、同時代における批評的テクストとの比較研究のみならず、ウィリアムズの世代の批評家たちの仕事を批判的に受け継ぎ、構造主義やポスト構造主義、ポストコロニアリズム研究で重要な仕事を残している論者たちの批評をも比較検討の対象にしつつ、ウィリアムズのテクストの先駆的な意義とシンギュラリティを明らかにすることがこの目的であった。

そして最後に、20 世紀の英文学とウィリアムズたちの世代の論者たちが取り組んだ問題が、ひろく現代社会の多様な問題を正面から扱いながら社会変革に寄与していくことを目標としたものであった点をふまえ、ウィリアムズの文学、批評から読み取られるテーマ、すなわち、本研究課題の題目に挙げている「文化」「社会」「労働」といったテーマが、20 世紀後半から現代に至る社会の変化の中でいかに論じられ、またそうしたテーマを考えることがどのように現代社会の問題に向き合うことになるのかを明らかにすることが目的となった。

３．研究の方法

上記２．で述べた目的を達するために、まず土台となるものとして取り組んだのは、レイモンド・ウィリアムズの仕事を精緻に検討することであった。ウィリアムズのテクストは小説、文学論、文化論、社会批評、そしてキーワード辞典の執筆などきわめて多岐に

わたるため、適切にそれらを時代的、ジャンル的なコンテクストのなかに位置づけることが重要である。そのため、小説作品については、ウィリアムズ自身が 20 世紀英文学を対象に論じた文学論と結びつけながらそれを英文学の流れのなかで捉えなおすという作業を行なった。この際に重点的に検討の対象としたのは、小説作品では *Border Country*, *Second Generation*, *Loyalties* の 3 作である。これらを、文学手法という点でリアリズムの伝統のなかに位置づけつつ、どのような社会的思考と問題認識にもとづいてリアリズムという手法が生み出され、いかなる意味でウィリアムズがリアリズムの伝統にのっとって小説を執筆したのかを明らかにすることにより、19 世紀から現代に至る長いスパンにおいて小説に体現された思考と問題意識を炙り出していくという方法をとった。これらの小説を論じることによって、これまでにほとんど研究されてこなかったウィリアムズの小説作品について新しい研究的視座を提供するのみならず、小説作品からウィリアムズの文化論や社会批評が照射されるように議論を組み立てることを方法の軸に据えた。

ウィリアムズの仕事を同時代の思潮のコンテクストのなかで位置づけるという目的に関しては、ニューレフトの生成の基盤となり、初期のウィリアムズも重要な論考を寄稿していた雑誌 *Universities and Left Review* や、それと合併して *New Left Review* 誌の創刊へとつながる *New Reasoner* 誌の様々な記事を分析するという方法をとった。これにより、いかなる言説的磁場に反応してウィリアムズが独自の文化論を組み立てていったのかが明らかになるし、同時代の作家や批評家と比較したときのウィリアムズのシンギュラリティを明らかにすることにもなる。こうすることによって、ウィリアムズの仕事のなかでもとりわけ重要であるとされる *Culture and Society* と *The Long Revolution* を歴史化しつつ、いまだ十分に研究されてきているとは言い難いニューレフト草創期に関わる雑誌記事等にも研究の光を当てるという方法をとった。

そして、ウィリアムズがキーワード辞典という形で、彼の文化論を歴史的意味論と呼ばれる手法のもとでまとめあげた仕事とその社会的な意義に倣い、21 世紀の現代においてウィリアムズが批評的に取り組んだ「文化」「社会」「労働」といったテーマをキーワードとして捉えて現代社会を批評するという方法を採用し、社会批評の論点を提示するという作業に取り組んだ。ウィリアムズの重要な著作の精読と分析をベースに、ニューレフト以降のイギリス文化論の研究成果と、現代におけるマルクス主義、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアリズム研究等の成果を踏まえて、現代日本においても意義のある論考の発表をめざすという方法論を追求した。

４．研究成果

ウィリアムズの仕事の再検討という作業のなかで、とくに力を入れたのが、従来の研究では見過ごされがちであった小説の分析と検討であり、これについてはイギリスにおける国際シンポジウムでの口頭発表と、論文 2 本の成果を上げた。イギリスの雑誌 *Key Words* 誌に投稿した論文では、ウィリアムズの小説 *Loyalties* を分析し、それを 20 世紀の労働運動や反ファシズムの問題、イデオロギー論という論点から分析した。20 世紀の英米文学のみならず、文化論や社会批評でも重要な役割を果たす批評家フレドリック・ジェイムソンの批評を議論に組み入れつつ、ウィリアムズの小説に体現された社会批評と社会運動の意義を明らかにした。2012 年の国際シンポジウムで行なった研究発表では、ウィリアムズの小説 *Second Generation* を精読しつつ、それと三部作を形成し、ウィリアムズの文化論との密接なつながりにおいて最重要視される *Border Country* をはじめ、ウィリアムズの初期の重要な議論を照射するような形で読解を組み立てた。イングランドの一地方とウェールズの町を結びつける地理的視座が、イギリスをグローバルな観点から相対化して、のちのポストコロニアリズムの論点につながるような批評的洞察を示していることを指摘し、テリー・イーグルトンのようなウィリアムズの仕事を批評的に継承している現代イギリスの批評家の論考の検討も絡めつつ、いかに小説という形式を通してウィリアムズが文化論の土台をなす思考を深めていったのかについて論じた。この成果は *Raymond Williams Kenkyu Special Issue* に発表した。

また、ウィリアムズを 20 世紀英文学の流れと批評史のなかに位置づける試みとしては、D・H・ロレンスを同時代と後代の批評家たちがどのように評価し、その評価をいかに批判しつつウィリアムズたちの世代の批評家が独自の文化論へと発展させていったのかをたどるために、ロレンスを論じたマルクス主義批評家クリストファー・コードウェルの文学論・文化論の精読を軸に据え、それと E・P・トムスンやウィリアムズの仕事を比較しながら、近現代社会の動態を決定づけてきた認識論を明らかにするという試みを「“border country”の認識論」において行なった。ニューレフト草創期の思潮的コンテクストを明らかにしつつウィリアムズの仕事のシンギュラリティを明らかにする試みとしては、テクスト研究学会においてみずから中心となり「定期刊行物と文学／歴史」というシンポジウムを企画し、そこで *Universities and Left Review* や *New Reasoner* に発表されたテクストを検討しながら、ウィリアムズの文学論と文化論の時代的な意味を歴史化するという試みを行なった。ウィリアムズの仕事の意義をイギリスの

みならずトランスアトランティックな文脈で再検討する試みとしては、日本英文学会関東支部のシンポジウムで「冷戦期ナショナリズムの諸相」という観点からリチャード・ホガートの文化論とウィリアムズの文化論とを比較検討し、冷戦やナショナリズムという政治的なコンテクストのなかでニューレフト草創期の文化論が帯びた政治性を炙り出す発表を行なった。

ウィリアムズのキーワード辞典における歴史的意味論の意義を現代社会の批評に活かそうという試みの成果は、2013年に刊行した共著『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』として発表した。このなかでは、「文化」「価値」「物語」「倫理」「疎外」といったキーワードを、ウィリアムズが20世紀英文学とイギリス社会の変容に対峙しつつ取り組んできた批評のあり方から学びうる手法で論じ、現代の新自由主義社会を有効に批判する視座を確立することを目指した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① Yasuhiro KONDO, Realism in the Long Revolution: A Reading of Raymond Williams's *Second Generation*, *Raymond Williams Kenkyu Special Issue*, 査読無, 2013年, pp. 35-52.

②近藤康裕、“border country”の認識論――クリストファー・コードウェルからロレンスへ、『D.H.ロレンス研究』、査読有、22号、2012年、pp. 1-13.

③ Yasuhiro KONDO, ‘To Feel the Connections’: Collectivity and Dialectic in Raymond Williams’s *Loyalties*, *Key Words: A Journal of Cultural Materialism*, 査読有, Vol. 9, 2011年, pp. 112-123.

〔学会発表〕（計 4 件）
① Yasuhiro KONDO, Realism in the Long Revolution: A Reading of Raymond Williams's *Second Generation*, Long Revolutions in Wales and Japan Conference, 2012年11月2日, Richard Burton Centre.

②近藤康裕、ニューレフトの誕生、テクスト研究学会第12回大会シンポジウム「定期刊行物と文学／歴史」、2012年8月31日、甲南女子大学.

③近藤康裕、1950年代の文化論とナショナリズム――労働者階級文化、文学、批評、日本英文学会関東支部大会英米文学部門シンポジウム「冷戦期ナショナリズムの諸相」、2011年11月5日、慶應義塾大学.

④近藤康裕、クリストファー・コードウェルからロレンスへ、日本ロレンス協会第42回大会若手シンポジウム「ロレンスのテクストの可能性」、2011年6月26日、神戸大学.

〔図書〕（計 2 件）
①大貫隆史ほか編、研究社、『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』、2013年、近藤康裕、総頁数 382 (pp.11-18, pp.88-105, pp.246-252, pp.276-282).

②川端康雄ほか編、慶應義塾大学出版会、『愛と戦いのイギリス文化史1951-2010年』、2011年、近藤康裕、「文化としてのストライキ――1970年代の労働運動」、総頁数 478（pp.53-67）.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤 康裕（KONDO, Yasuhiro）
慶應義塾大学・法学部・専任講師
研究者番号：20595409

(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：